

発迹顕本に就いて

林 日 邵

一 序

日蓮上人の開目抄に「発迹顕本せざれば、真の一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず」、と示されてあります。

御遺文中「発迹顕本」という聖語は唯この開目抄だけではありません。顕本としての類語には「開迹顕本」「拂迹顕本」とあります。それぞれ使命を持つている顕本であります。

日蓮上人は「法華經の智解は天台伝教には及ばざれども、慈悲の過れたる事は恐れを懐きぬべし」と仰せられておられますから、末弟としては一往天台伝教等の御著述に依るに至当と思ひ天台の三大部を開いて見ました。至らぬ書見ではありませんが拾ひ読みをして見ますと、「発迹顕本」という語源は「涌出品」の「如来今欲顕発宣示諸仏智慧」の文中顕発の二字に本迹の二字を附して、「発迹顕本」との成語であると判断して諸仏の智慧は発迹、本仏の智慧は顕本と判断して、本仏の智慧は寿量品に於いて開顕するのであるから、先

づその準備として涌出品に於いて諸仏の智慧を開顕し、諸仏の智慧に依て諸菩薩が仏智見を開く、菩薩の仏智見を開かんとする努力が、上求菩提下化衆生の仏道修行となつて十界成仏の道が自然に開けて来る。「一大事因縁故出現於世」と説かれた主旨も一見して明了となる。それで日蓮上人は開目抄に「発迹顕本せざれば真の一念三千もあらわれず、水中の月を見るが如く、二乗作仏も定まらず、根なし草の波に浮ぶが如し」、と書き示されたのであります。

二 仏知見

仏知見とはいかなる知見かをみるに「法華玄義」の体玄義に於いて

体字訓_レ礼_レ法也、各親_ニ其親_一、各子_ニ其子_一、君臣_レ擯_レ節、若無_レ礼者則非_レ法也、

出世法体亦復如_レ是、善惡凡聖菩薩仏、一切不_レ出_ニ法性_一、正指_ニ実相_一以為_ニ正体_一也

故壽量品云、不如三界見於三界、非如非異若三界人見三界、為異、二乘人見於三界、為如、菩薩人見三界、亦如亦異、仏見三界、非如非異、雙照如異、今取仏所見、為実相正体也

妙樂釈箋に云く、

取壽量所見ニ与ニ方便実相体同、所見者経云、如斯之事如来明見、正明佛有能見之徳、故須云見、取所見辺以証体同、経中広明如如来知見等相云云

此の文を読むに注意すべきは、三界を中心にして於いて智見を以て認識する事である。三界は国土世間である。国土世間は依報である。三界の人は同居土に於いて同居土を見ている故に、各々その住処が異っている、それを見ている凡夫は情見である。二乗は三界の国土世間を如と見る。有も無にひとしきもの、因縁和合の世界もすべて無に帰して如と見ている。菩薩は三界の国土世間を見る時、居住の依報は正報の暮し方に依りて地獄もありという見地に立つて上求菩提下化衆生の修行道場であると見ている。仏は三界を見て非実非虚非如非異不如三界見於三界如斯之事如来明見無有錯謬と説かれて依報のとらえ方より、正報の当体を觀察すべく示された。故は天台は体玄義の実体を示す時、別行経序に於いては妙者妙名不可思議也、所言法者十界十如權実之法也、と正報を挙げて実相の当体を示し、七番共解能化の實事を示す時には依報の国土世間の三界即ち欲界色界無色界の所見を挙げて、正報人の能見

発迹顯本に就いて(林)

の知識の度合を示した事は実に巧妙な揭示だと思ふ。つまり一水四見の智見である。妙樂大師が、壽量品の益物所宜を明す一段に對して、「豈離伽耶別求常寂、非寂光外别有娑婆」即ち仏智見を開いて見る時は、娑婆即寂光即身成仏の大覺に達した時、此の境地を自然に躰得すると云うのである。これを壽量品の十重顯本の中の開迹顯本を中心として見る時、その知見を正しく体得する為には、その準備智見として諸仏の発迹顯本を説き納得せしめねばならぬと云うので、天台は本門の十妙を釈するに十科を建て説明された。その第六に三世料簡の一科、第一が発迹顯本である。

三 発迹顯本の依文

第六約三世料簡者文云、如来自在神通之力、如来大勢威猛之力、如来師子奮迅之力、即是三世益物之文

若過去最初所証權実之法名為本也。

從二本証已後方便化他開三顯一。

發迹顯本者還指最初為本。

今日發迹顯本亦指最初為本。

未來發本顯迹亦指最初為本。

三世乃殊毗盧遮那一本不異。

如百千枝葉同趣一根云云。

過去最初所証權実之法名為本とは、釈尊の自覺である中間今

日の発迹願本は覺他である。未來の発本願迹は寿量開願久遠実成の教主積尊を會得して覺滿の智見に得入無上道した所が成仏の境界である。自覺覺他覺滿の仏陀の境界と神力品の通一仏土の統一の仏国土が実現すべきである。積尊はその仏国土を建設すべく努力されている事が仏陀である。

四 法華經に於ける發迹願本

一、法華經序品の八王子の発大乘意が第一号であると文句に示されてあります。大乘とは菩薩行上求菩提下化衆生の事です。随て文殊は八王子を教化した妙光であり、八百の弟子の中の求名と云う人は弥勒、君だよ、八王子が大乘心を発願したので今日仏陀人定の事を答える事が出来る。必ず今日も発大乘意の人の為に法華經を説かれる準備である三世説法の儀式である。本光瑞如此と發迹願本された。

二、三界の支配主に就いての發迹願本、所謂国土世間の支配主の問題である。文句に「云経梵魔等者、梵即色主亦三界主、魔為欲主云云」。梵天王は梵天の主であり、また欲界色界無色界の主でもある。魔は欲界の主である。ところが仏は譬喩品に「今此三界皆是我有」と宣言されてある。それは八相成道の時降魔の一相をして欲界の主は追払われて五百塵点劫以前より仏陀が界主であり、「其中衆生悉是吾子、而今此処多諸患難唯我一人能為救護」と發迹願本された。

三、舍利弗の發迹願本

舍利弗尊者は智恵第一と云われた仏弟子である故に仏は從三昧安詳而起舍利弗よと云われ諸仏智慧甚深無量其智慧門難解難入であり、その智慧ではとても及ばぬ。吾れでさえ成仏已來大變な努力であると引導衆生令離諸著と腹を割つて話して五仏同道開三願一四十年の諸法は令離諸著の爲であつた事が理解出来て同入法性の自己觀念が誤りであつたと仏陀に懺悔したので記前を頂き菩薩行に入つた之が上根の二乗作仏の發迹願本であると示された。

四、大通智勝仏の三千塵点の成仏

積尊の成仏の内証から見れば、觀彼久遠猶如今日であるがそれは云わないで、なお十六人の王子が父の説法までに十二因縁生滅順逆の法門を説いて聞法衆に發大乘意の結縁衆を造り、十五人は伝法者として四方八方に出張したが積尊は父の跡を繼いで娑婆の教主として今日に及んでいるのだと、所化の教益と能化の実事に付いて發迹願本の主旨を述べ、下根の二乗作仏を説かれたのです。

五、内秘菩薩行外現是声聞の發迹願本

これは富楼那尊者の如き行為の人を挙げて、かりに表面は論にもくびにもかからん人でも菩提心が有て、人を導く力の有る人は内秘菩薩行外現是声聞の行者として發迹願本に預る人である。

六、如来と阿難の発迹顕本

これは如来と阿難が、過去に空王仏の処で修行中に誓願を立てた。「阿難は常樂多聞、我は常勤精進」の本願通り今日成就して、我は菩薩衆に菩提を説き、阿難は我が法を結集して法蔵を護つていと、本願の発迹顕本である。

七、諸仏の発迹顕本

涌出品の本門正説段の玄関口に於ける釈尊の御挨拶の御言葉に、如来今欲顕発宣示、諸仏智慧と三世益物に就いて発迹顕本されたのであります。

八、如来の発迹顕本

寿量品の題号釈に就いて如来者二仏三仏本仏迹仏の通号なり。発迹顕本三如来者永異諸経。「法華論」云

示現成大菩提無上故示三種菩提一応化菩提二報仏菩提三法
仏菩提

九、菩薩の発迹顕本

寿量品の対告衆は菩薩に付て近謂の情見を持っている者とい
ない者である。天台云菩薩有三種、下方他方旧住云、下方
即本日所化故無執近之謂一

十、発本顕迹の発迹顕本

これは寿量開顕以後の本仏久成を知つた以後の仏知見を得
た知見で釈尊を拝し、説法を考えると筋が通て迷う処が無い。
それで分別功德品の一念信解以後は本仏の知見に依て信

発迹顕本に就いて(林)

解するので本仏の知見を以て迹門を見よ、と云う事にて発本
顕迹と云い、妙樂大師は一念信解は本門立行の首めなりと釈
されて、寿量品以後の十二品を読む時は知見を改めよ、との
御指導である。

五 発迹顕本の力用に就いて

結意云、此経開権顕実四悉檀、大用最為雄猛、発迹顕本、四悉檀永
異衆経、何者迹中力用已出諸教、本中十用諸経無一、況当
有十、迹中悉檀已出諸経、本中悉檀諸経無一、況有四可三
意推、無煩多記一也。

以上を以て発迹顕本の項を終わります。

註、引用文は、日蓮聖人御遺文昭和定本。日本古典文学大系親鸞
集日蓮集。法華玄義及釈論・法華文句及記。以上

(法華宗真門流宗学研究所々長)